

# 高校生は少年サッカー競技者の「やる気」を どのように評価するのか？

名 取 洋 典

## 問題と目的

「やる気」は学習意欲や動機づけとして心理学の分野で研究が進められてきた(鹿毛, 2004)。動機づけとは、「行動の理由を考える時に用いられる大概念」(赤井, 1999)であり、行動をする原因として存在すると想定される。従って、動機づけの多寡は、実験における反応の生起頻度や持続時間として測定されてきた(例えば, Aarts, Gollwitzer, & Hassin, 2004; Deci, 1971)。また、多くの研究では自己報告式の質問紙により、自らの動機づけを評定させている。

しかしながら日常的には、活動に従事している様子を見て他者の「やる気」を感覚的に評価していることも少なくない。では、どのような行動が「やる気」があると評価されるのだろうか？名取(2014a)では、少年サッカーを題材として、中学生、高校生、大学生の比較を行った。その結果、名取(2006a; 2006b)と同様に、「まじめに」活動に取り組んでいる様子が「やる気」と評価されていた。具体的には、順番を待っている際に課題とは関係のないおしゃべりをしていると捉えられると、やる気は低く評価されていた。同様に、課題の説明が行われている際に靴ひもを結んでいたり、足を振ったりして、しっかりと話を聞いていないと判断されると、やる気は低く評価されていた。反面、同じ行動が、準備している、動きたくてしかたがない様子で捉えられるとやる気は高く評価されていた。また、中学生の評定値は大学生に比べると全体的に高かった。

本研究では少年サッカーを題材に、活動に従事しているどのような様子から「やる気」が評価されるのかについて、新たに高校生のデータを加えさらに探索的に検討を加えることを目的とした。また、年齢が上がると評定値が下がるという結果が、高校生だけに限った場合にもみられるのかどうかを確認する。

## 方法

### 調査対象者

名取(2014a)で報告した、東北地方にある私立X中高一貫校の高校生29名(男子13名、女子16名、平均年齢16.3歳、1年生～3年生)および、公立Y高校の高校生17名(男子10名、女子7名、平均年齢16.5歳、1年生～3年生)に加えて、私立T高校の17名(男子6名、女子11名、平均年齢16.5歳、1年生～2年生)、公立U高校の70名(男子40名、女子28名、不明

2名、平均年齢16.0歳、1年生～2年生)、V高校160名(男子82名、女子77名、不明1名、平均年齢16.7歳、1年生～3年生)、W高校88名(男子27名、女子58名、不明3名、平均年齢15.6歳、1年生のみ)から回答を得た。回答に不備があった場合には、分析ごとに除外した。

#### 評定対象映像

公益財団法人日本サッカー協会(JFA)の公認C級ライセンスを持つ指導者とサッカー経験のない教育心理学を専攻する大学院生との比較(名取, 2007a)、心理学を専攻する大学生と大学院生を対象とした調査(名取, 2007b)、中学生、高校生、大学生の比較(名取, 2014a)、サッカー審判員指導者を加えた比較(名取, 2014b)で用いられたのと同じ映像を用いた。

実際の少年サッカーチームの練習で行なわれていた5ヶ所に分かれてのパス練習(Figure 1)をデジタルビデオカメラで撮影した。

課題開始時のシーン1(3分22秒間)と、シーン1から3分34秒経ち、指導者がやる気の低下を感じて課題を変更するまでのシーン2(2分16秒間)に映像を分けた。シーン1の冒頭1分間は指導者による課題の説明を聞いている映像であった。それ以外の映像は「やる気」の比較が容易に行なえるように、また、評定が技術の巧拙のみに左右されないように、複数の競技者が同時に映像に収まる順番待ちをしている様子を中心にした。同時に映像に収まる時間が他の競技者たちと比較すると長かった4名の少年サッカー競技者(以下A、B、C、D)を評定対象者とした。

#### 撮影者

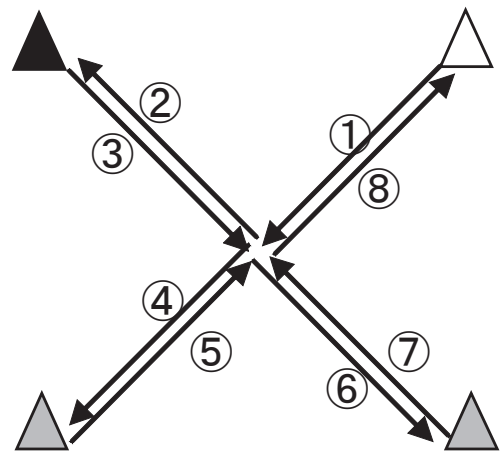
教員養成学部所属していた大学3年生1名に、「子どもたちの『やる気』の様子が見られるシーン」を撮影するよう依頼した。教育実習中に「やる気」の比較が容易に行なえるように、また、評定が技術の巧拙のみに左右されないように、複数の競技者が同時に映像に収まる順番待ちをしている様子を中心にした。同時に映像に収まる時間が他の競技者たちと比較すると長かった4名の少年サッカー競技者(以下A、B、C、D)を評定対象者とした。

#### 調査内容

シーン1、2それぞれにおける、4名の評定対象者の「やる気」の評定(「やる気」評定値)を10点満点で求めた。加えて、評定の理由について自由記述での回答を得た。

#### 手続き

X中学・高校での調査、Y高校の生徒に対する調査、T高校での調査、U高校での2回の調査、V高校での調査、W高校の生徒に対する調査の7回の調査を実施した。「やる気」の評定と理由の自由記述を求めたことは共通するが、講演や授業の中の課題として実施したために、7回ごとに回答状況は異なっている。



注) △は中央にパスを出し、その方向に走る(①)。中央でパスを受けたら、パスが出された方向から反時計回りに1つ隣の▲にパスを出し、その方向に走る(②)。パスを受けた▲は中央に移動した△にパスを出し、その方向に走る(③)。これを繰り返していく。4つの三角形の地点で順番待ちをする。

Figure 1 課題の内容

1. X中学・高校での調査 X中高体育館で行った文化講演会の講演冒頭に実施した。中学1年生から高校3年生までの全学年の生徒が一斉に参加した。4名の対象者の「やる気」の評定と、評定理由の自由記述を回答する質問紙を配布した。評定対象映像は、生徒の前方のスクリーンにプロジェクタで照射した。シーン1とシーン2の視聴後、各5分間、質問紙に記入する時間を設けた。「評定値は必ず記入し、理由は特にあれば記入する」よう教示した。中高でまとめてもらい、回収は後日郵送にて行った。

2. Y高校の生徒に対する調査 私立大学をY高校の生徒が訪れて大学の講義を体験する、一日総合大学の模擬授業の冒頭、大学講義室内で実施した。質問紙を配布後、評定対象映像を生徒前方のスクリーンにプロジェクタで照射した。シーン1とシーン2の視聴後、質問紙に記入する時間を設けた。全員が回答を終えるまで時間を取り約10分間を要した。「評定値、理由のどちらも記入する」ように教示した。模擬授業終了後、質問紙を回収した。

3. T高校での調査 T高校で行った模擬授業の冒頭、高校の教室で実施した。質問紙を配布後、評定対象映像を、生徒の前方の50インチプラズマディスプレイに映し出した。シーン1とシーン2の視聴後、各5分間、質問紙に記入する時間を設けた。「評定値は必ず記入し、理由は特にあれば記入する」よう教示した。模擬授業終了後、質問紙を回収した。

4. U高校での調査(1時間目) 模擬授業の冒頭、U高校の教室で実施した。質問紙を配布後、評定対象映像を生徒前方のスクリーンにプロジェクタで照射した。シーン1とシーン2の視聴後、各5分間、質問紙に記入する時間を設けた。「評定値は必ず記入し、理由は特にあれば記入する」よう教示した。模擬授業終了後、質問紙を回収した。

5. U高校での調査(2時間目) 模擬授業の冒頭、1時間目と同じ教室で、別の生徒に対して実施した。質問紙を配布後、評定対象映像を生徒前方のスクリーンにプロジェクタで照射した。シーン1とシーン2の視聴後、各3分間、質問紙に記入する時間を設けた。「評定値は必ず記入し、理由は特にあれば記入する」よう教示した。模擬授業終了後、質問紙を回収した。

6. V高校での調査 V高校体育館で行った進路講演会の講演冒頭に実施した。1年生から3年生までの全学年の生徒が一斉に参加した。質問紙を配布後、評定対象映像を生徒前方のスクリーンにプロジェクタで照射した。シーン1とシーン2の視聴後、各3分間、質問紙に記入する時間を設けた。「評定値は必ず記入し、理由は特にあれば記入する」よう教示した。講演会終了後、質問紙を回収した。

7. W高校の生徒に対する調査 私立大学をW高校の生徒が訪れて大学の講義を体験する、一日総合大学の模擬授業の冒頭、大学講義室内で実施した。質問紙を配布後、評定対象映像を生徒前方のスクリーンにプロジェクタで照射した。シーン1とシーン2の視聴後、各3分間、質問紙に記入する時間を設けた。「評定値は必ず記入し、理由は特にあれば記入する」よう教示した。模擬授業終了後、質問紙を回収した。

#### 調査時期

X中学・高校での調査は2013年9月中旬に、Y高校の生徒に対する調査は2013年9月初旬に実施した。また、T高校での調査は2014年3月初旬に、U高校、V高校での調査およびW高校の生徒に対する調査は2014年10月下旬に実施した。

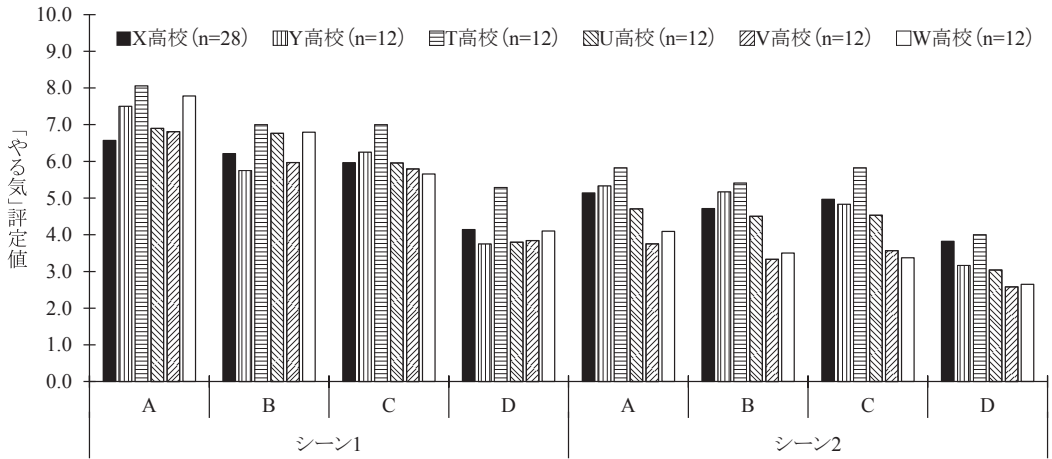


Figure 2 「やる気」評定の平均値

## 結果

評定対象者によって、評定される「やる気」が異なるかどうか、異なるとしたらどの要因によるのかを明らかにするため分散分析を行った。また、年齢と「やる気」評定値との関連を明らかにするために相関係数を算出した。

### 「やる気」評定値の平均値の差の検定

「やる気」評定値を従属変数とし、学校、シーン、評定対象者を要因とする、3要因分散分析を行った。平均値を Figure 2 に図示する。

調査対象者は、4名全ての評定対象者について、シーン1と2の両シーンでの評定を行ったため、学校は参加者間要因であり、シーンと評定対象者は参加者内要因である。学校要因は6水準(X高、Y高、T高、U高、V高、W高)、シーン要因は2水準(シーン1、シーン2)、評定対象者要因は4水準(A、B、C、D)であった。

分散分析の結果、学校、シーン、評定対象者の3つすべての主効果が有意であった ( $F(5, 364)=5.39, p<.001$ ;  $F(1, 364)=146.61, p<.001$ ;  $F(3, 1092)=86.47, p<.001$ )。また、学校×シーンの交互作用が有意であった ( $F(5, 364)=3.21, p<.01$ )。加えて、シーン×評定対象者の交互作用が有意であった ( $F(3, 1092)=18.51, p<.001$ )。

そこで、単純主効果の検定を行った結果、シーン1とシーン2における学校の単純主効果はともに有意であった ( $F(5, 728)=2.33, p<.05$ ;  $F(5, 728)=6.86, p<.001$ )。有意水準5%でRyan法による多重比較を行った ( $MSe=9.78$ ) 結果、シーン1においてはT高とV高の平均値差のみが有意であったのに対して、シーン2においてはT高・X高・U高とW高・V高の平均値差、Y高とV高の平均値差が有意であった。また、6つの学校それぞれにおけるシーンの単純主効果はすべて有意であった (X高、Y高、T高、U高、V高、W高の順に、 $F(1, 364)=11.35; 9.08; 19.92; 22.06; 42.37; 57.89, p<.01$  (Y高のみ);  $ps<.001$  (それ以外))。 (1) シーン1に比べてシーン

2の「やる気」が低く評定されていたこと、(2) シーン1ではT高の「やる気」評定値のみが高く、V高との間に差がみられたこと、(3) シーン2ではV高に加えてW高の評定値が大きく下がり、下げ幅の少なかったX高・U高やY高との間に差がみられたことを示す結果であった (Figure 3)。

また、シーンおよび評定対象者の単純主効果の検定を行った結果、評定対象者A、B、C、Dのいずれにおいても、シーンの単純主効果が有意であった (順に  $F(1, 1456)=162.18; 104.62; 67.41; 23.90, p<.001$ )。いずれにおいても、シーン1での評定値の方が、シーン2の評定値よりも高いことが示された。また、シーン1、シーン2のいずれにおいても、評定対象者の単純主効果が有意 (順に  $F(3, 2184)=100.34; 28.9, p<.001$ ) であったため、有意水準5%でRyan法による多重比較を行った ( $MSe=2.96$ )。結果、シーン1においては、全ての組み合わせでの差が有意となり、AはBより、BはCより、CはDよりも「やる気」を高く評定されていたことが示された。一方、シーン2において、BとCの組み合わせの差は有意でなかった。Aは他の3名に比べて高く「やる気」を評定されていたこと、BとCの間には差がなく、Dは他の3名に比べて低く「やる気」を評定されていたことが示された (Figure 4)。

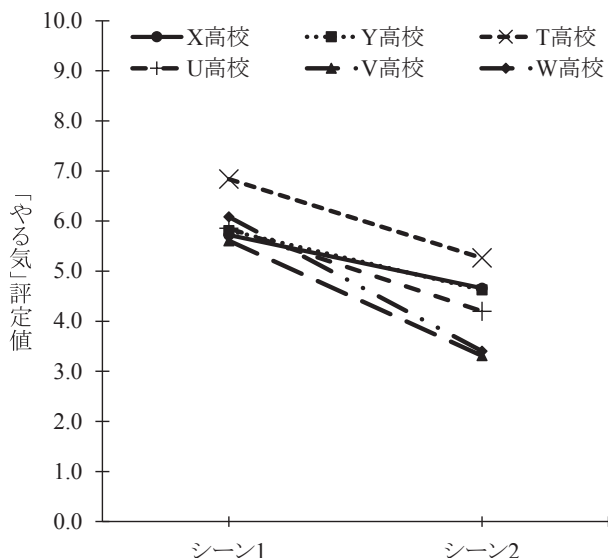


Figure 3 学校×シーンの交互作用

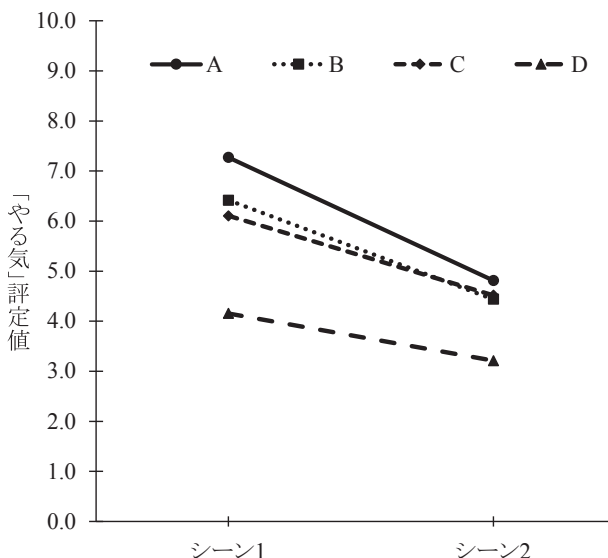


Figure 4 シーン×評定対象者の交互作用

Table 1 年齢と「やる気」評定値との相関係数

	年齢 (n=367)	X (n=28)	Y (n=12)	V (n=156)	
シーン1	A	-.11*	-.05	-.32	-.06
	B	-.08	.08	-.16	.03
	C	.03	.08	.51	-.09
	D	.03	-.31	.46	.11
シーン2	A	.00	-.25	-.05	.16
	B	.05	-.24	-.19	.23**
	C	.05	-.29	.14	.13
	D	.04	-.44*	.31	.17*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

### 年齢と「やる気」評定値との相関係数 (Table 1)

調査対象者の年齢とシーン1、2におけるA、B、C、Dの4名の「やる気」評定値との相関係数を算出した。また、学校毎での年齢との関連を明らかにするため、全学年のデータが揃ったX高、Y高、V高については学校別での相関係数も算出した。

全体での結果において有意であったのは、シーン1におけるAの評定値との負の相関 ( $r = -.11$ ,  $p < .05$ ) のみであった。また、X高においては、年齢と各評定値との間には相関がみられないか、有意でなかったものも含めて負の相関 ( $r_s = -.44 \sim -.24$ ) のみがみられた。しかし、Y高では正の相関もみられている ( $r_s = .14 \sim .51$ )。人数の多かったV高の結果で有意な相関係数がみられたのは、シーン2のBの評定値との間 ( $r = .23$ ,  $p < .01$ ) とDの評定値との間 ( $r = .17$ ,  $p < .05$ ) であり、いずれも正の相関であった。

これらの結果から、年齢が上がると評定値が下がるという関係は明確ではなく、むしろ、年齢が上がることにより評定値が上がることもあることが示された。

### 考察

本研究の目的は、少年サッカーを題材に、どのような様子から「やる気」が評価されるのかを検討することであった。また、年齢が上がると評定値が下がるという結果が、高校生だけに限った場合にもみられるのかどうかを確認することも目的とした。

以下、「やる気」評定値にみられた各要因の影響について考察し、年齢との関連を検討した後、今後の展望について述べる。

#### 「やる気」評定値におよぼす各要因の影響

「やる気」は、シーン1よりシーン2で低く評定されていた。また、4名の評定対象者の内、Aの「やる気」が一貫して高く評定され、反対にDの「やる気」が低く評定されていた。これは、これまでの研究 (名取, 2007a; 2007b; 2014a; 2014b) と同様の結果であり、まじめさが「やる気」と評価される可能性を示している。

ただし、「やる気」の低下についての評価には、学校間で違いがみられた。本研究のみからでは、学校の違いの何が影響しているのかを明らかにすることはできないが、比較的高い評定値を維持

する評価者集団と、大きく下げる評価者集団がいることは明らかである。「学校」間差ということにこだわることなく、この差をもたらす要因について検討する必要があると考えられる。

### 年齢と「やる気」評定値との関連

年齢と「やる気」評定値との関連を検討するために相関係数を算出したが、関連は明確ではなかった。名取（2014a）では、中学生に比べて大学生は「やる気」を低く評定していた。一方、名取（2014b）では、大学生よりも年長のサッカー審判員指導者を加えて比較した結果として、評定値が年齢段階とともに単純に低下してはいなかったことを見出している。「やる気」の評価における発達を考える際には、過去のどのような経験が現在の評価に影響を与えているのか、個別の経験を捉えた変数を加えての分析が求められる。

### 今後の展望

本研究の結果から、単純に年齢が上がることにより評価が厳しくなるわけではないことが示唆された。評価の違いに影響する要因についての更なる検討が必要である。具体的には、大まかに「まじめさ」を捉えている評価者とより細かな動きを捉えている評価者が存在する可能性が考えられる。

競技者がおしゃべりして遊んでいるように見えても、視線はボールを追っていることを見出せば、やる気をそれほど低くは評価しない可能性もあるだろう。児童の積極的な授業参加行動についての研究（安藤・布施・小平，2008；布施・小平・安藤，2006）などを参考に、評価の理由にしている行動についてのより詳細な分析が必要である。

また、動機と行動の関連性についての素朴理論の研究（伊藤・池上，2006）では、ポジティブな行動の背景には、ポジティブな動機だけでなくネガティブな動機が想定されるのに対して、ネガティブな行動の背景にはポジティブな動機は想定されにくく、ネガティブな動機が想定される傾向が示されている。このことから、まじめな様子が「やる気」と捉えられるよりも、不真面目な様子がやる気がないと捉えられる不均衡があることも考えられる。動機についての素朴理論がどのようにして発達していくのかという視点を取り入れながら、日常なされている「やる気」の評価について研究を進めていきたい。

### 引用文献

- Aarts, H., Gollwitzer, P. M., & Hassin, R. R. (2004). Goal Contagion: Perceiving Is for Pursuing. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 23-37.
- 赤井誠生 (1999). 動機づけ 中島義明他 (編) 心理学辞典 有斐閣 pp.622-623.
- 安藤史高・布施光代・小平英志 (2008). 授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響——自己決定理論に基づいて—— 教育心理学研究, **56**, 160-170.
- Deci, E. L. (1971). Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **18**, 105-115.
- 布施光代・小平英志・安藤史高 (2006). 児童の積極的授業参加行動の検討——動機づけとの関連および学年・性による差異—— 教育心理学研究, **54**, 534-545.
- 伊藤公一郎・池上知子 (2006). 動機と行動の関連性についての素朴理論 心理学研究, **77**, 415-423.
- 鹿毛雅治 (2004). 「動機づけ研究」へのいざない 上淵 寿 (編) 動機づけ研究の最前線 北大路書房 pp.1-28.
- 名取洋典 (2007a). 行動から評価される「やる気」——少年サッカーを題材に—— 日本教育心理学会第49回発

表論文集, 256.

名取洋典 (2007b). 少年サッカー競技者の「やる気」の評定——映像についての他者評定 日本心理学会第71回大会発表論文集, 1174.

名取洋典 (2014a). 「やる気」はどのような行動から評価されるのか——少年サッカーを題材とした中・高・大学生の比較—— いわき明星大学大学院人文学研究科紀要, 12, 111-122.

名取洋典 (2014b). 「やる気」はどのような行動から評価されるのか——少年サッカーを題材とした他者評定の比較検討—— 日本教育心理学会第56回発表論文集, 646.

(なとり ひろのり/教育心理学)